

未来を ひらく ゆふいん 図書館

展く

開く

拓く

拓く

一人ひとりの
生き方を応援する
図書館で
あるために

財団法人
人材育成
ゆふいん財団

はじめに ささやかだけど 役に立つこと

湯布院町には図書館がありません。

湯布院に図書館ができるとして、それによって私たちの暮らしがどう変わるのか、あるいは変わらないのか。図書館が私たちの暮らしにどう関わってくるのかをみなさんと一緒に考えてみようと思います。

図書館を暮らしの中に活かしていければ、みんなが利用する、湯布院らしいすばらしい図書館ができるに違いありません。今、私たちはそのゆふいん図書館の入口に立っているところなのです。

日本の7割の町村には図書館がありません。ところが、市の96%には図書館があるのです。多くの地方、とりわけ過疎地に暮らしている日本人は、図書館を利用したことがないといっても過言ではありません。利用することのない人にとって図書館は膨大な資料を集めた、情報のゴミ箱に思えるかもしれません。しかし今は利用しなくても、そこにあれば将来、必ず利用することができるのです。

考えてみると、私たちの暮らしの中には、同じようなとても大切な場所があります。例えば病院です。

健康な今は利用しなくても、病気になれば必ず利用します。病気を治したい人は自分で病院に行き、身体の痛みや辛さを先生や看護婦さんに手伝ってもらいながら治療します。図書館もそんな病院に似ています。

ある人は図書館のない村を「知的無医村」と呼びました。図書館が知らないこと、わからないこと、そして不安や心配ごとを解きほぐす場所としたら、確かに図書館は心と頭の病院のようです。

病院はさまざまな症状を持つ患者さんを診察し、その人に合った処方箋を示します。風邪だからといってみんな同じ治療はしません。子どもやお年寄り、妊婦さんでは治療法が違つてく

るからです。

図書館でも同じことです。

湯布院にもさまざまな地域があり、職種、環境の異なる人が暮らしているわけですから、その価値観、考え方も千差万別です。病院が一人ひとりの命を大切に扱うように、図書館も一人ひとりの心を大切に扱う場所なのです。

一人ひとりが大切に扱われる町は、とても豊かな町です。一人ひとりがしっかりした町は、きっと先の見えない不安な時代を切り開いていけるでしょう。

病院は身体に異常や不安のある人なら、だれでも受け入れ、診察します。湯布院の先生方は病院に来られない人には、診察に出かけて来てくれます。

図書館も興味や関心、疑問を持つすべての人を受け入れ、それに応えてくれるでしょう。図書館に来られない地域の人には、自動車図書館で出かけて行くでしょう。

アメリカのある片田舎では郵便局員が図書館の本を一人暮らしの老人の家まで配達し、健康状態も診ているそうです。この郵便局員は血圧計などを鞆に詰め、異常があれば病院に通報するそうです。過疎地に暮らす人々の、心の過疎（不安）は道路や施設だけでは取り除けません。人の心と手によって初めて解きほぐすことができるのです。

私たちは子どもたちの健やかな成長と、私たちの健康な暮らしのために病院を大事にするように、子どもたちの心豊かな成長と私たちの心安らかな暮らしのために、図書館を大事にしたいと思います。

湯布院の図書館がすべての人に開かれ、一人ひとりを大切に育てていけば、図書館は私たちの暮らしの中に静かに溶け込んでいくことでしょう。

そして、図書館とともに育った人は、自分で考え、学び、判断する力を身につけた人となり、湯布院の未来をひらくことでしょう。そこに、ささやかだけど私たちの暮らしの役に立つゆふいん図書館の姿が見えて来ます。

未来を ひらく ゆふいん 図書館

もくじ

はじめに ささやかたけど役に立つこと……5

1 図書館は子どものころを開きます……………9

図書館あらかると〈1〉 太子町立図書館……12 東京子ども図書館……13

どこの国の子も「おはなし」が好き 千竈八重子……14

2 図書館は一人ひとりの生き方を応援します……………15

図書館あらかると〈2〉 三日月町図書館……18 守谷中央図書館……19

みんなの図書館 桑野和泉……20

3 図書館はコミュニティをつくれます……………21

図書館あらかると〈3〉 荻田町立図書館……24 石垣市立図書館……25

「開かれた僧院」の話 中谷健太郎……26

4 図書館は町の現在を記録し未来を創造します……………27

図書館あらかると〈4〉 日野市立図書館……30

暮らしの中の資料こそ宝もの 山下恭子……31

記憶することから創造することへ 加藤昌邦……32

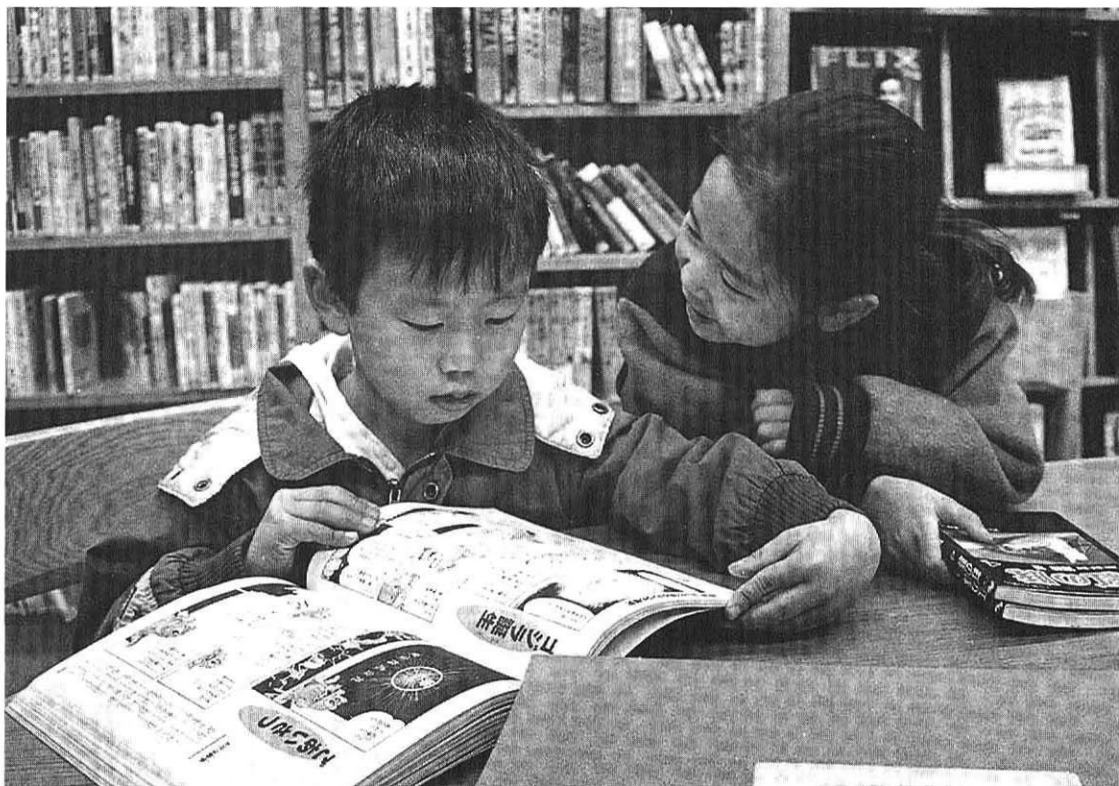
この本に寄せて 竹内哲……………33

あとがき……………36

この本をつくるために参考にした本……………37



ゆふいんの図書館は
一人ひとりの生き方を
応援するところであってほしいと
願っています
そこでは地域が育む生活文化や
町の現在を記録し
未来を創造します
本と人を結びつける
いろいろなサービスを通して
子どももおとなも
自分の小宇宙をひらいて行きます



図書館は 子どものマユマユを 開きます

おとなも子どもも湯布院という生活の場で、
自分にとっての大事な何かをみつけること、

それが図書館のめざす拡がりのある暮らしです。

そのための豊富な資料や情報が図書館にはあります。

町の人々がどんな産業と教育を望み、

どんな家に住みたいと思い、

どんな食べ物をおいしいと感じ、

どんなことを美しいととらえるか。

図書館は、そうした知恵や技術、

感性ともいえる価値を支えます。

それらをおとなから子どもへ、

子どもからおとなへ、

生活全体の中で

大切なことや価値あるものとして

ともに展^ひいてゆきます。

図書館は響きあいの場所なのです。

そして、子どもたちは

本のある場所から世界を拡げ、自分を知り、

自ら伸びてゆく足元を強くしてゆきます。

驚きの体験は、人生を豊かに耕します

図書館ができていけばよろこぶのは子どもたちではないでしょうか。子どもたちにとって図書館は、本のある遊び場のようなものです。日常の生活とは離れた、心のときめきに会える空間です。そこでは、本の扉がいつも開かれています。その扉を通して、いろいろな世界に出かけ、不思議なことや美しいもの、ワクワクドキドキするような気持ち、驚きに満ちた冒険だつてできるのですから。

また、子どもは聞いたことを何でも驚きとともに受け取ります。優れた読み物は、子どもたちに驚くセンスと能力を養います。楽しいことを見出す経験は、驚くことから始まります。

子どもは驚くのが大好きです。上手です。そして、驚くという実感から、実は創造力と想像力が育つのです。人から人への肉声で「お話し」を伝える活動を積極的に繰り広げている、アメリカの図書館学者スペンサー・G・ショウ博士はこう語ります。

『驚くセンス（センス・オブ・ワンダー）とは人類にとって極めて貴重な財産と考えられます。なぜかという、好奇心を生むのは驚きです。その好奇心から想像力が育つからです。冒険の場を設定するのも驚きです。創造の種子を刺激するのも驚きです』

アメリカでは、1歳児、2歳児を対象にした読みかせなどの図書館サービスが始まっています。その目的について竹内哲氏は、『1歳の子が読書の楽しみを身につけて成長し、80歳になっても心豊かな生活を送ってほしいという、図書館員の願いがあつてのことだ』と紹介しています。

子どもの時からの読書の体験が人生の80年先への準備となるとは、何と息の長い話でしょうか。身体が健康で、年を重ねるたびに、心がみずみずしく自分が楽しいことを発見してゆくよろこびがある。このことは、人生の幸せそのものです。

図書館は、人類が過去から引き継いだ知恵や知識、情報を通して、人が一生を貫いてその人らしく生きてゆくことに必要な機会を、驚きの初穂とともに提供します。子ども時代から毎日変わることなく…。

**子どもの成長を助け、
伸びようとする力を刺激します**

図書館には一人ひとりの成長に応じた子どものためのたくさんの本があり、公開、貸し出しをするほかに、定期的に子どもと本を結びつける活動を展開してゆきます。

図書館は、ひとりの子どもが年齢を重ねて本とともに育つてゆくところです。図書館では、まず子どもたちに自分自身の登録カード

をつくります。このカードを持つことで、個人としての責任を理解するようになり、自身が独立した一人の人として大切に扱われていることを知ります。さらに、図書館のどこかに子どもたちは、毎日の生活空間から離れて、自分だけのお気に入りの居場所を見つけたりもします。この場所が彼らの、想像や創造の旅の舞台となるのです。

また、図書館には知識や情報についての専門家がいます。そのような図書館員は、子どもたち一人ひとりの要求にたえず応える準備をし、その子にふさわしい本や情報を手渡します。子どもたちが知りたいこと、興味のあること、すなわち知識や情報がどこにあるのかを知り、それを入手し、活用する力を獲得できるように、援助してくれます。

さらに図書館は、一人の子どもが世界の中を自分の足で歩いてゆくのを見守る存在ともいえます。そこは、勉強ができる、できないなどの、周囲から与えられる評価や序列のない世界であり、人の成熟を積極的に「待つ」ところなのです。図書館は一人ひとりの子どもの成長を助け、伸びようとする力を刺激する場所なのです。

図書館は自分に期待できる人間を育みます
それは町が生きている証でもあります

現代は、生活のスピードがかつてないほど

に加速し、人々は高度に発達した情報社会を築いています。変化の速い環境の中で、子育てが親の知識や現在の学校教育だけでは成り立ちにくい時代を迎えています。

このような状況の下、21世紀に生きる子どもは、自分の足でしっかりと立つために、自ら知識の学び方を学ぶことが必要になります。図書館では知識の引き出し方と活用の仕方を体験して学ぶことができます。このことは、個性化の教育を掲げる現代社会において図書館の担う大きな役割のひとつです。図書館の存在価値ともいえるでしょう。

子どもは成長し、やがて自分さがしをはじめます。現代の日本の子どもたちは、外からの刺激が多い反面、年齢とともに深い悩みや心の揺れを抱えているといわれています。子どもたちにとって、湯布院の町に家や学校以外に、自分の居場所と世界を拡げる魅力的な場所があることは、行く手に大きな可能性を約束してくれます。

社会環境がどのように変化しようとも、自分に期待できる子どもが育つことは、町が豊かになることにも通じます。

図書館

あらかると

1

太子町立図書館●兵庫県

教室も図書館のフロア

学校に出かけてのブックトーク

兵庫県の太子町図書館は、町内の幼稚園と小学校でブックトークやストーリーテリングを行っている。

揖保郡や龍野市では、昭和50年からすでに図書館と学校が連携して、学校に出かけてのブックトークが行われていた。そうした活動を知る小学校長からの要請で、開館以来、各学校に「図書館の時間」を設定してもらい図書館員が出かけて実施している。

同町には幼稚園6と小学校4校がある。このうち2つの幼稚園に毎月1回ずつ図書館員が定期的に訪問し、年少組と年長組の各クラスで「おはなし会」を開いている。その他の幼稚園は直接来館した上で行われている。

小学校は全部の学校に一学期に一度訪問し、貴重な授業時間を空けてもらって「図書館の時間」をもっている。小規模校は全クラスで、他の3つの学校は原則として2年生と5年生に限っているが、要望があれば他の学年にも応じている。

低・中学年を対象としたストーリーテリン

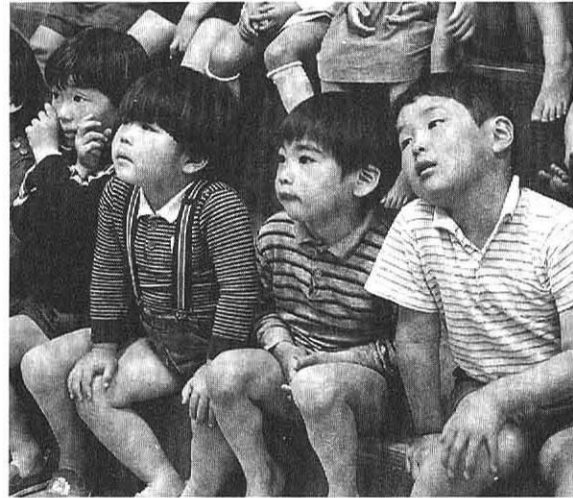
グでは、昔話を中心としたお話しを2〜4話、これに絵本などを2〜4冊組み合わせて行われている。高学年を対象としたブックトークの時間では、5〜10冊の本を紹介する。また、後になって図書館でそれらの本を探す子のために、紹介した本のリストも配布している。

「図書館の時間」では、紹介した本を複数(約30〜50冊)持参し、終了後教室で貸出しを行う。ブックトークの出来・不出来や児童数にもよるが、1回に10〜40冊を貸し出す。ブックトークの出来が悪いと、まったく借りられず、「子どもたちの評価」Ⅱ「図書館員のブックトークの巧拙」がはつきり示されるという。まさに真剣勝負である。

紹介した本を数週間後に図書館で借りる子がいたり、5年生のときに紹介した本を中学1年生になって借りる子もいる。また、図書館に通って来ていた子が、幼・小・中学校の教諭になり、自分が子どものころ楽しんだ本をクラスで紹介し、さらに図書館員の学校訪問を要望し、実現に協力してくれる。図書館が児童サービスの成果を近視眼的にみないゆえんである。

●太子町立図書館 1983年開館／兵庫県揖保郡太

子町 131017／人口約3万1000人



子どもはお話が大好き(品川区立大崎図書館)

東京子ども図書館●東京都
25年目を迎えた「子どもと本」の
ための専門図書館

財団法人東京子ども図書館は、小さな私立図書館である。しかし、日本の図書館に児童サービスの思想と実践を普及してきた貢献度ははかり知れないほど大きい。1997年11月に、念願の自前の建物(鉄筋コンクリート3層、延床面積550㎡)を完成させ、新たな歩みをはじめている。

「本が好きで、本にたのしみを見いだした大人が、そのたのしみを子どもたちと分かち合おう、それも、自分の子どもだけでなく、周囲の子どもたちと一緒に」という気持ちから、

1950年代にはじまった2つの家庭文庫、「土屋文庫」「かつら文庫」を出発点として、20年近く活動が続けた関係者たちがより継続的で幅広い活動をめざして、1973年に財団法人を設立し、「東京子ども図書館」がスタートした。文庫時代には、サービス対象はもっぱら文庫にやってくる子どもたちであったが、法人になってからは、子どもと本のために働くおとなたちへのサービスに比重が移っていった。

資料室の運営 館内には、児童文学や子どものための図書館活動を研究する資料室(約1万5000冊)がある。特に、戦後の子どもの本で、何らかの受賞をした本のコレクション、日本および世界の昔話集のコレクションはほかには例をみない。

講演会・講習会の開催 「月例お話し会」による児童サービスの実践活動とストーリーテリング実践者養成のための「お話し講習会」(2年間)や「夏期講習」(3日間)。講習会の卒業生は1000人を超え、全国で活躍している。

出版活動 『お話のろうそく』20冊シリーズや『たのしいお話』全9巻は、全国のお話の担い手に必須のテキストとなっている。また、『私たちが選んだ子どもの本』は、子どもの本選びには欠かせない資料である。

●東京子ども図書館 1973年開館/東京都中野区
江原1-19-10 /対象は全国(賛助会員800人)

I Love 図書館

どこの国の子ども「おはなし」が好き

湯布院町「鬼ヶ島文庫」主宰 千竈八重子

私は23年前のセピア色になった古いメモをみつけ、その思い出が昨日のことのように鮮明になり、お裾分けしたくなりました。

北欧の図書館を巡った時のこと、どの施設にも子どもたちの「秘密の部屋」とか人形劇や「ストーリーテリング（おはなし）クラブ」が備えられていました。20〜25人席の広さでソファが置かれ、職員手製の指人形や小道具が転がっている。照明も使用できるようになっています。どここの国の子どもも「おはなし」をきくのが好きなんだな。

ドイツの田舎の裏道を好んで歩くと、屋根の美しさ、森の深さ、オトギの国に出てくるような街並み。大小のすすけた四角な煙突をみて、サンタのおじさんが、あそこから出入りしているのかな…、三匹の子ぶたの家は、こんな石造りで小さかったのかしら…と。

深い森の中を歩けば、「赤ずきん」

の女の子がこんな森の道を歩き、あの向こうの樹の影に狼が隠れていて、おばあさんの家へ先回りしてたのか…。あれ！ おばあさんの家が堅く閉ざされている（森の向こうに一軒の小屋が見えていた。そんなメルヘンが生まれてくる自然がそこには備わっていました。日本の民話が、素朴な自然環境の中に生まれ育ったように、そこにはその地域特有のバックグラウンドが用意されているのです）。

図書館は、昔の古いイメージ（特定の人が調査、研究に使う場。学生の勉強室ではなく、町民が必要に応じて気軽に調べ物をしたり、憩ったり、本を読んだり、音楽を聴き、親も子ども、高齢者も思い思いの姿で利用するところなのです）。

ちよつと駅の待合室的ムードのある分館も見ました。日本のあちこちでも見られる風景ですが、町民が「大切な場」として触れている

ことは、手にとるようにわかりました。

当時、北欧には学校図書館はなく、公立の分館が学校の中にあり、職員も往来しているとうかがいました。保育園、幼稚園は団体貸出しで、0歳から保育の「よみきかせ」が実施されているのです。子どもは両親は、本、レコードをそこで借りて、家庭で親子読書の形をとっているとか。

スウェーデンでは図書館の本の貸出数で作家の課税が計られ、逆に貸出数によって国が作家に補助金を出しているなど、おもしろい面も知りました。駄作を防ぎ、よい作家、作品を育てるためだと聞いています。病院図書館も、患者用、育児用、高齢者用とそれぞれの分館形式です。「異国」が地続きの北欧、中欧では、4、5か国の本が準備されています。

湯布院図書館にも子ども向けたサービスの場を、小さくてよいからつくってほしいと切に願っています。この町の子どもたちが心豊かに育ちますように。

2 図書館は 一人ひとりの生き方を 応援します

図書館の扉はだれにでも開かれています。
赤ん坊、子ども、青年、成人、高齢者、
障害を持つ人々など、
年齢や人種、社会的信条、
性や貧富の差を問いません。
私たちは、毎日の生活の中で
自分にとって楽しいことを見つけるために、
いくつになっても図書館を利用できるのです。
そこは、人間の知恵や知識の宝庫です。
「本とつきあう」方法や楽しみを覚えた人は、

自分の心と本との対話を重ね、
「生涯、「ワクワクする心」を失いません。
人類が長い歴史の中で伝えてきた
知識や知恵、新しいものの考え方を
本は伝えてくれます。
そこから得られる深い感動や、
自分の中の未知なるものの発見は、
人生を豊かにしてくれるでしょう。
そのための応援をする場所が
図書館なのです。



図書館では一人ひとりが主人公

ものごとを知り、学ぶのは、なにも子どもや受験生だけではありません。まだ話すことのできない赤ん坊も、心身に障害を持つ人も、お年寄りも、働きざかりのおとなも、すべての人は日々、何かに気づき、学びとっています。そして図書館は、そこから生まれる小さな疑問を解決する手伝いをします。年齢や性別、貧富の差を問わず、知りたいこと、学びたいことのあるすべての人に、図書館の扉は開かれているのです。

これまで知らなかったことを知ることは、新たなよこびや驚き、時には悲しみや怒りであったりもするでしょう。その中から自分の興味のあることを見つけ、しかも続けていけるとしたら、それはとても楽しく、豊かなことだといえます。

何かをやってみようという気持ちは、すべての人の心の中にあるはずです。しかし、それは何かにふれなければ表には出てきにくいものです。図書館はその「何か」を、本というかたちで提供し、学ぶことへの「口あけ」の役割を果たしてくれます。それは決して、人からいわれてやったり、むりやり覚えたりするようなものではありません。

図書館には、訪れる一人ひとりの「知りたい」「学びたい」という気持ちに応えるために

情報や知識が、本や資料として用意され、どのように調べたらよいのかを手助けする専門家もいます。自分の好きなこと、関心のあることを自分で選び、さらにそれを深め、自身が主人公となって成長することを支援してくれる場所、それが図書館なのです。

楽しむための読書

本に親しむ第一歩は、「楽しむための読書」です。自分の興味・関心の向くままに、大きな本棚の中から自由に本を取り出して、好きな速さで読み、だれにも邪魔されずに想像力の翼を拡げる楽しみは、読書ならではのことです。図書館は、そうした利用者の要望に応えるために常に新しく本を取りそろえ、分類・整理して貸出しに備えます。

図書館には、人間が古くから積み重ねてきた発明・発見などの成功の記録、そして今では語る人のいなくなってしまう愚かな失敗の記録など、あらゆることが本や資料というかたちで蓄えられています。人は、自分に都合の悪いことは忘れてしまいがちですが、図書館は、そんな「負の遺産」をも残していくことを自らに課しています。そこには過去に、人間らしく生きる権利や本当のことを知る権利がおろそかにされたことへの反省があると同時に、失敗の歴史を保存することで、同じ過ちを犯さないようにという未来への期待が

込められています。

知りたいことへの手がかりを提供します

図書館には、さまざまな知識、資料が収められています。最近では、本だけでなくCDやビデオなどの視聴覚メディアまで扱っている図書館も少なくありませんが、それらの情報量は膨大なものです。その中から、自分の求める情報をすぐに探し出すことは、なかなかむずかしいことです。そのため、図書館には読書案内とか相談業務とか（レファレンス・サービスとも）といわれる仕事があります。レファレンス（reference）とは、膨大な書物の中から必要な知識や情報を探し出す能力のこと。その手助けをするのが司書という専門職員です。何か目的を持って書物を探す人のために、訪れた図書館にある本はもとより、時にはほかの図書館とも連携しながら、見つけ出すのがこの人たちの仕事なのです。

安らぎの場所、自分を再発見する場所

激しい速さで変化する時代にあって、私たちには自分を取り戻すための時間と場所が必要とされています。疲れたときに、腰を下ろしてひと休みする場所であること。これは図書館に求められる大切な役割のひとつです。「図書館は魂の安息所である」ということばがあります。日常の雑事や社会的な緊張から

離れて、安全に・静かに・好きなだけ独りでいられる場所が図書館です。そこではだれもが心の荷をおろして、ひとときの安らぎを得られるのです。

図書館は、「本」を通じて元氣や知恵を与えてくれる場所でもあります。本を通じて違う生き方に会ったり、新しい技術や知識を獲得したり、これまでに学び残したことにもう一度再挑戦することもできます。利用者の働きかけしで、図書館はさまざまな可能性を持った自分を再発見する機会を与えてくれる場所なのです。

学校や公民館との連携

学校にも図書館があります。そこには子どもたちが積極的に授業の中にとけこめるように選ばれた本がそろっています。公共図書館では、より幅広い範囲の本をそろえて、子どもたちや住民一人ひとりの興味や関心に応えたり、学校の教育活動を支援する役割を持っています。

公民館にも図書室があり、湯布院町民に親しまれています。公共図書館ができるからといって、公民館の図書室がなくなるわけではありません。図書館に通いにくい地域に住んでいる人たちに本を届ける「移動図書館」や「図書館分館」の拠点として、公民館と図書館は連携していきます。

図書館

あらかると

三日月町図書館●佐賀県

人を結び、人とともに 成長する図書館

生涯学習センターとの複合で建設された三日月町図書館は、複合館としては数少ない成功例のひとつである。

その要因は、司書資格を持つ館長を専任で置き、図書館として独立した運営を維持することができたこと、集会室や視聴覚室などを完備した生涯学習センターとの複合により、図書館として資料の提供・貸し出しや読書案内などに集中できたことなどがあげられる。

図書館部分はワンフロアの箱型。742㎡の開架フロアは町の規模からして広いとはいえないが、7万冊の開架資料を収蔵し、三方がガラス窓で採光もよい。

書架はフロア中央部に配置され、高さはすべておとなの目の位置よりかなり低く抑えている。このため、生涯学習センターと共用の入口から内部を見通せて、しかも開放的で、明るい雰囲気を感じられる。また、ティーンズ・ルーム、子供コーナー、おはなしの部屋、郷土の人びと資料展示コーナーなどを開架フロア周囲に配置し、コンパクトではあるが居

心地のよい空間を確保している。

三日月町図書館はまた、住民参加の図書館建設が理想的なカタチで成功した一例でもある。たとえば、図書館長である北島悦子さんは公民館図書室の利用者の一人で、図書館建設のための構想策定に住民代表の一人として参加した。さらに、建設が具体化し準備室が発足すると、請われて室長に就任。開館とともに館長を務めている。つまり、図書館利用者の代表が館長になったわけである。

そのことは、利用者の希望に基づいた選書、きめ細かな読書案内徹底など、利用者側に立ったサービスに反映されている。

そのひとつはティーンズ・ルームである。喫茶店を思わせる雰囲気の部屋はまさに10代の若者向けである。学習参考書や古典、世界の名作など青年向けの資料のほかに、ファッション・音楽・アニメ雑誌、芸能人が書いた本、楽譜・楽器の教本、マンガの描き方、コバルト文庫、ティーンズ・ハート、メッセージボードなどがそろえてある。地域社会の中で自分たちの居場所が見つけられずにいる中学生、高校生のために、ティーンズ・ルームはここまでやってくれるのかと、若者ならずともうれしくなる。ここは今、三日月町の中高生

の人気スポットとなっている。

また、A4判4ページの図書館だよりの毎月発行、多彩な図書館講座の開設など、事業の運営に生まれたての図書館が住民とともに歩み、ぐんぐん成長しているようすが見て取れる。

館長を含めて6人の図書館員は、全員が嘱託職員であるが、給与は役場職員と同等の扱いである。開館2年目を迎える1998年4月からは、自動車図書館が町内を走るようになる。

●三日月町図書館 1996年開館／佐賀県小城市三日月町大字長神田1845番地／人口約1万人

守谷中央図書館●茨城県

想像をかきたて 創造力を培う非日常空間

外観はそれほど奇抜なデザインではない。だが、玄関をくぐり一般開架空間に足を踏み入れた途端、一般開架フロアの広さと奥行き、深さに思わず吸い込まれる錯覚を覚えた。「この広大な図書空間に一体どれほどの資料があり、私の知的欲求をどれほど満足させてくれるのだろうか」。そんな期待感がフツフツとわいてくる。それは未知の資料情報への期待感であり、自らの人生の持つ可能性への期待感でもあろうか。ここに滞在するだけで

日常の喧騒をさえ忘れそうなのだ。この非日常空間こそ、設計者が意図的に創出したものなだろう。

3階建ての2階部分に相当する一般開架フロアの横に玄関があり、児童フロアと視聴覚フロアは玄関を入ってすぐ横の階段を降りた1階に配置され、3つのフロアがそれぞれ独立した空間になっている。

特筆すべきは3階部分の調査研究フロアである。2階の一般開架フロアから3階へは吹き抜けになっていて、円形の壁に設置された書架に専門書・参考資料がずらりと配置されている。そこを回廊が走り、手摺りのついた回廊からは2階のフロアを見下ろすことができる。回廊の幅は250cmほどあり、ところどころに机・イスを備えた遊び場の空間がしつらえてあって、利用者は他の人に気兼ねすることなく、ゆったりとした気分で心ゆくまで資料に目を通すことができるように配慮されている。

すぐ横を高速道路が走っているため、防音設備にはかなり神経を使ったといわれ、そうした喧騒からの隔絶を意識した設計が、都市生活者にとって非日常的空間として創造力を培う場ともなったようだ。

総工費は、16億8000万円。鉄筋コンクリート3階建て、延床面積3500㎡の大型図書館である。蔵書冊数は15万冊。登録率は

37%と高い。年間の貸出冊数は約30万冊で、住民一人当たり7冊弱である。これだけの図書館サービスを維持するための年間図書館購入費は5000万円。多様なサービスを支える

スタッフは11人の司書と20名のアルバイト職員である。

●守谷中央図書館 1995年開館／茨城県北相馬郡
守谷町大字大柏9372／人口約4万5000人

I Love 図書館

みんなの図書館

ゆふいんファミリー代表 桑野和泉

私は、いつもワクワクすることがあり、楽しく、いそがしいこの町での暮らしが好きです。

いつもこの思いは変わりませんが、時として、この町でバリア（障壁）を感じることがあります。

私は子どもが生まれ、今までの暮らしが急激に変わりました。いつも、2人で過ごす中、自分とこの赤ちゃんを受け入れてもらえる空間、自分が過ごしたい、求めているものがある空間が、この町にないことに気づきました。私は社会とのつながりも、町とのつながりも、その当時、遠いものになってしま

いました。

町は、元気のよい、足腰のしつかりとした、目もよく見える、耳もよく聴こえる、標準的な体格の人たちを基準に考えられているのでは。

でも、町にはいろいろな人々が暮らしています！

もし今、私たちが考えている図書館が存在するならば、私も、そして、多くの方がそこで過ごし、交わるのではないかと思えてきます。

ゆふいんの図書館は、だれにでも、いつでもウェルカムであってほしいと願っています。生まれたばかりの赤ちゃんから、高齢者、障

害を持っている人、そして、この町を訪れる人にも。この町で生活している以上、みんな、分けへだてされることもなく、その人の希望に応じて知る権利が保障されているのです。そこには決してバリアはないのです。

「図書館を考えること」は、町を考えること。社会の仕組みにあてはまらない人をなくし、だれもが最適に、あたり前に暮らせる社会を目指すノーマライゼーションの考えが、この図書館から始まり、広がっていくことを願っています。

図書館は、一人ひとりを認めてくれます。私たちみんなの図書館です。から。

3 図書館は コミュニティを 育てます



図書館は知識や情報をあつかう専門機関です。人々はだれでも図書館を通して知識や知恵を平等に分ち合うことができます。湯布院町に住む人にも、町を訪れる人にも開かれた「知識や情報の発信源」。それが、ゆふいん図書館です。また、人々が安心していられる場所を提供することも図書館の大切な役目のひとつです。人と人、人と組織、組織と組織を情報によって結び、情報の力でまちを活性化する。それが、図書館がコミュニティづくりに貢献する力です。そのために図書館は専門職員を育て、他の図書館とのネットワークを構築し、利用者本位の運営をめざすのです。

「情報」が育てるコミュニティ

図書館があつかう情報の主役は、「記録された情報（recorded knowledge）」のことです。広い意味での「本」と読みかえてもよいかもしれません。書籍・雑誌をはじめ、町の広報や各種の行政資料、郷土資料や古文書、また最近ではビデオやCD、CD-ROMといった音声や映像による記録媒体も広く収集しています。もともと図書とは、図と書、つまり絵と文字とで表したもののことから、最近ではそれに音声加わったといえるでしょう。

図書館は、広い意味の本を湯布院町みんなの共有の知的財産として集め、だれにでも分けへだてなく提供します。人類の知識の果実を、だれもが平等に分け合うこと。これが情報がつくるコミュニティの土台です。

これまでの町のコミュニティは、まず中心となる人がいて、そこに人が結びついてグループや小さな社会を形成してきました。いわゆる人縁や地縁です。

これに対し「情報が育てるコミュニティ」とは、情報を中心にすえた人と人の関わりあい、つまり情報縁です。情報を真ん中に人との関わりができ、個人の興味や好奇心、テーマによって人間関係が結ばれてゆくのです。具体的には、生活場面で同じ関心を持つ人

が出会い、地域を越えて継続的に結びついたり、互いに学び合い、地域どうしが交流することです。それは、出会った人々が知識や情報を共有し、開いてゆくことにほかなりません。

ゆふいん図書館が開館することは、この町にさらなる人々の出会いの場が開かれることを意味します。同時に、そうした人々の出会いの場が数多く開かれることによって、図書館がさらに大きく育っていくのです。

図書館から拡がるネットワーク

図書館は「本と人を結ぶ」ためにさまざまな活動支援を行います。

例えば、みんなが持つっている情報を持ち寄り・図書館の本と照らして深め・それを分け合うような人と人の関わりづくりは、図書館を舞台としたまちづくりそのものです。

また、図書館利用者に向けて自分たちの活動をアピールしたり、ボランティアを募集する掲示板機能を持つこともできます。図書館員が仲立ちをして、関心を持つグループどうしを結びつける役割も考えられます。

湯布院町には年間約400万人もの人が訪れます。初めて湯布院へ来た人でも、ゆふいん図書館へ行けば町の情報がわかり、町の人々の活動のようすもいきいきと感じられる。そんな情報発信の拠点にもなります。

最近の図書館の書籍検索システムはとても便利になってきました。その図書館にない書籍でも、県内市町村や県立図書館が国立国会図書館へ問い合わせて、その場で検索可能なネットワークをつくり、本を借りることができます。

その一例として、大分県立図書館では、利用者の調査相談に応じる専用のカウンターが設けられています。ここでは調べごとや資料についての問い合わせは、電話やファックス、郵送でも受けつけ、必要に応じて他の図書館から資料を取り寄せたり、専門機関への紹介を行っています。

さらに発展すれば、各地の大学図書館や専門図書館とも結んで、より深い資料検索の手法をつくることも可能です。でも、そこはギブ・アンド・テイク。「ゆふいん図書館も外の人に開かれ、湯布院ならではのキラリと光る魅力を持った図書館でなくては」。そう考えるのです。

図書館サービスのあり方と新しいネットワーク

図書館の運営は利用者本位が原則です。特に利用者を待たせることは、図書館サービスにとって大変なマイナスです。

図書館界には、こうした図書館サービスのあり方を示す「ランガナタンの五法則」があ

ります。

- ① 本は利用するためにある
- ② 本はすべての人のためにある
- ③ すべての本を読者に
- ④ 読者の時間を節約せよ
- ⑤ 図書館は成長する有機体である

この5つの原則が維持されることによって初めて、図書館サービスは利用者のためものになります。

近年、情報通信網の急激な発達により、日本もアメリカ並みの情報社会になってきました。今や人々は条件さえそろえば、あらゆる情報を手に入れることができます。

しかし、そうした情報がいつでも、だれでも、どこでも手に入るというわけではありません。これからの図書館には、そうした情報ネットワークへの窓口としての大きな役割が期待されています。

アメリカの図書館協会では、ネットワーク・サービスの窓口として図書館がだれでもわかりやすく使えるように、情報の公平性や公開性、利用の容易さなどの到達目標を掲げています。

ゆふいん図書館も、こうした図書館の原則と新しい情報ネットワークの考え方に立って利用者本位のサービスが用意されることでしょう。

図書館

あらかると

3

苅田町立図書館 ● 福岡県

「感動しあう場」を求めて

ボランティアとともに育ち合う図書館

「パペットひゆるるんば」結成

子どもたちや地域の人とふれあひながら、人形劇の楽しさや夢と一緒に感じてほしいと「苅田町の母と子の読書会」に参加していた母親8人で、1994年4月、人形劇ボランティアグループ「パペットひゆるるんば」は結成されました。この名の由来は、子どもたちや地域の人たちの目の前に、突然楽しい世界を拡げることができたら、という願いから来ています。



人形劇も本と人をつなげる手段のひとつ

人形劇は、手づくりでこだわりたいという思いがある一方、本格的な経験者がいないため、図書館の資料で勉強したり、たくさんの方の経験者を見て、人形、小道具、背景、脚本、音響とすべて8人で試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいきました。

そんな時、苅田町立図書館とパペットひゆるるんばとの出会いがありました。それは、「平成7年度の図書館まつりで、公演をお願いしたい」という一本の電話から始まったのです。幼稚園、保育所等への月1回の公演をしながら、図書館まつりへ向けての新作製作や練習は並大抵のことではありませんでした。しかし、図書館まつりの時のAVホールでの子どもたちの笑顔やキラキラ輝く瞳は、私たちひゆるるんばに十分な感動と、充実感を与えてくれました。この時の感動が、今の私たちの活動の原点といえるのではないかと思います。それ以来、毎年ひゆるるんばも図書館まつりに参加するようになりました。今では、人形劇制作も練習もすべて、図書館の会議室やAVホールで行っています。

感動しあう場のある図書館

図書館とボランティアの関わり方も、まだ

手探りの状態ではありますが、お互いが向き合い模索しながら、少しずつ前進してと思われまふ。人形劇ボランティアサークル「パペットひゆるるんぱ」は、図書館に支えられ、育ち合っているのです。

ひゆるるんぱは考えまふ。「人間の幸福とは、人間らしい感情を育てること、感性を開くこと」ではないかと。

従来のような、本の好きな人だけが集まり、本を静かに読むだけの場所という殻を脱ぎ捨て、町民の感性と情報が集結したすばらしい「感動しあう場」のある苅田町立図書館にこれから私たちが期待してまふ。

川野 留理子（苅田町）

●苅田町立図書館 1990年開館／福岡県京都郡苅田町富久町1-17-8／人口約3万5000人

石垣市立図書館 ●沖縄県 「日本最南端の情報センター」 から吹く熱い風

石垣市立図書館は、「八重山の風土と伝統を踏まえ、八重山らしいおおらかな空間を持ち、市民に親しまれ使いやすいこと」を目標に掲げた「日本最南端の情報センター」として建設された。

特に、地域資料約2万点は県立図書館に次ぐ収集率で、将来は日本の南の玄関口として

東南アジア関係資料の収集も計画している。「八重山関係新聞記事検索システム」は、八重山で初めて新聞が発行された大正6年以降の全地元紙を網羅したもので、市民利用はもちろん、島外の研究者からの評価も高い。

検索の対象となる記事は、①原則として八重山に関する内容の記事、ただし、②八重山出身者の署名記事や、③八重山のそのときどきの世論を反映する社説やそれに類する記事である。「石垣市立図書館新聞記事基本分類表」による検索（縦横10分類で100項目の検索）が可能で、現在、システムを構築中だ。

石垣市立図書館では「図書館が地域文化の掘り起こしと再発見を促し個々の確立に深く寄与する」ことを願って、展示会や講演会の実施にも力を入れてきた。

最近では「平和を考える図書展」（1996）を手づくり資料パネルと図書資料で開催した。同年の「ゲルニカ展」は、地元中学生の巨大な卒業制作を図書館入口に設置して衝撃を呼んだ。「県民投票展」（1997）では、わかりづらい米軍基地強制収用の手続きを図解的にパネル化してみせた。図書館講演会では、一流の講師陣が子どもやお年寄りにも親しみやすい図書館の話を通り返り語りかけている。

●石垣市立図書館 1991年開館／沖縄県石垣市浜崎町1-1／人口約4万1000人

I Love 図書館

「開かれた僧院」の話

グリーン・ツーリズム研究所主宰 中谷健太郎

ジャン・ジャック・アノーという人物をご存知か。フランスの世界的な映画監督です（映画はいつも世界的だ）。そのアノー監督がアメリカで撮った話題作「セブン・イヤーズ・イン・チベット」を持って日本にやってきました。それがどうした？ ある日、東京のアノー監督から電話が入って、「湯布院に泊まりたい。ブラッド・ピットと一緒に行く」。今をときめく、というか何というか、あのブラッド・ピットだから大変です。「極秘に」と頼まれたけれど素焼きの瓶から水が洩れるように噂が滲みでてまことに困りました。ファンの群が押し掛けたらどうしようと頭を抱えているところへ、「ブラッド・ピット、ユケナイ。アメリカニ、カエッタ」「万歳ッ」。一同よかった、よかったで、当日はアノー監督と翻訳の戸田奈津子氏を交えて、湯布院の歴史の話を愉しみました。

アノー監督の作品に「薔薇の名前」があります。中世イタリアの僧院を舞台に、シヨーン・コネリー神父が活躍する推理サスペンス・ドラマです。見所は、謎を秘めた大僧院が焼け落ちる場面で、まことに脚がすくみ、目が眩みます。そこには仕掛けがあつて、実はその僧院はダマシ絵でできているのです。階段は途中から裏返っているし、廊下は壁に吸い込まれて絵になってしまう。僧院長のほかは、上の階にゆくことができないのです。上の階には何があつたか。本です。おびただしい本、本、本……。誰でもが手に入れられるようにみえて、実はそのようにはなっていない智恵や、知識や、情報の山々々。ところでブラッド・ピットが湯布院に泊まっていれば、ビッグな事件として情報化され、記録されたことでしょう。しかし泊まらなかった話もなかなかおもしろい情

報なのです。だけどそれは世間に記録されないし、されてもすぐに消えてしまう。すなわちこの原稿は消えてしまいます。町の中に開かれた僧院がない限りは…。

その町の暮らしが活々しているか、豊かであるかは、市場にモノが沢山あるとか、人が多勢住んでいるとかだけで計られるものではありません。その町に培われている物語や智恵や情報や技術や歴史が豊かであるかどうか、それらがきちんと整理されていて、いつでもだれでもがさっと取り出せる状況にあることが大事なのです。もう大量生産と大量消費で走り廻る世紀は終わろうとしています。

フランス出身のアノー監督がアメリカで映画を撮って、その映画の舞台がチベットとイタリアで、その監督が湯布院に来て…、その「湯布院」とは何ものであるか、それを何処で知り、確かめ、貯蓄してゆくか。

——「開かれた僧院」という名の地域図書館。

4 図書館は 町の現在を記録し 未来を創造します



図書館は、湯布院のまちづくりや文化活動に関する資料を収集・保存します。また、日々移り変わる暮らしの中身や生活を記録収集し、資料として整理します。これらの資料は町民だけでなく、この町を訪れるあらゆる人の求めに応じてすばやく、的確な情報として提供されます。また、メディア工房は個人やグループの情報発信をサポートし、地域活動や文化活動をより深め、拡げることにも貢献します。町の過去・現在に関わる資料を収集し情報発信することにより、ゆふいの図書館は情報センターとしてだけでなく、町の未来を創造する人々の活動拠点となるでしょう。

**町の人々が行うさまざまな地域活動を
記録し保存します**

今、湯布院の各所でさまざまなイベントや地域活動が行われ、多くのチラシやポスター、パンフレットがつくられています。また、それらと連動して本が出版されたり資料がつくられています。それらは活動の中から生み出されたもので、私たちがどんな思いで暮らし、何を大切にして生きているかを示す具体的な資料です。

ところが、これまでつくられたチラシ・ポスター・パンフレットの多くが散逸して、その活動内容をうかがい知る資料はほとんど残っていません。一部は関係者の手元に残っているのですが、だれでもいつでも利用できるとは限りません。

図書館は、今住民が行っている活動が生み出すすべての資料を収集記録し、それらを必要とする人に情報としてすばやく提供することができます。また、計画的に収集され整備された資料は後世に私たちの生活文化を伝える役割を果たすことができます。

**この町での暮らしの中身を
収集し、記録します**

「30年前のあの町角の風景、あのときのようすはどんなだったかなあ」

一人ひとりがくつきりと思い出すことのできる風景・情景は、その人の記憶の中で明瞭に生きています。しかし、昔の生活に関する古老の話、方言、口頭伝承などの先人の生活記録は時間の経過とともに風化し、そのままでは、やがて消えてしまいます。

また、昆虫や植物、動物の分布図をはじめ、湯布院の産業・自然・歴史に関するさまざまな資料は今ほそんなに価値あるものには感じられませんが、10年後、20年後には貴重な歴史資料になります。現在の町に関するあらゆる資料を収集記録することは、この町の生活文化を蓄積し新たな未来を創造することにつながるのです。そのために図書館は私たちの暮らしの中身を資料として保存・整備し、必要とする人に提供します。

また、こうした生活記録のほかに、湯布院に関する新聞、雑誌記事の切り抜きをつくり、テレビ報道やドラマ、ニュースなどの湯布院に関するあらゆる情報を収集し、いつでも情報として提供できるようにします。

行政資料を選別し保存します

行政の情報公開が求められる時代になりました。近い将来、湯布院町でも条例が整備され情報公開が行われるでしょう。

しかし、図書館が収集保存しようとする資料は、条例に規定されないものや条例に基づ

く保存期限の切れたものです。一見、役に立たないゴミのように見える行政資料も、後世に残すべき貴重な記録となるものがあります。

また、行政が刊行する各種調査報告書や広報紙、出版物はすべて図書館が収集保存し、資料として整え必要とする人に情報として提供できます。図書館のこうした活動は行政の情報公開を補完し、支えることとなります。

ゆふいん図書館が、これまでに紹介した資料の収集と保存に関する機能を十分に発揮するには、しっかりした収集・保存システムと専門職員の確保が大きな条件となります。

「ゆふいんインフォメーション」で、
あなたの疑問にお応えします

「湯布院について知りたいことやわからないことがあったら図書館に行きなさい。あそこならたいいのことがわかるよ」。

湯布院のことについて子どもや町を訪れた人に聞かれたあなたは、将来こう答えるようになるでしょう。

湯布院の自然、歴史、方言、新聞、雑誌などのニュース記事、テレビ報道やドラマ、年中行事、さまざまなイベント情報。あなたはそれらの情報を自分の書斎から探し出すよりも速く手軽に入手することができます。しかも、それらの情報は、この町を訪れる人にも

リアルタイムで提供されます。

それを可能にするものは、豊富な情報・資料、住民の求めに的確に 대응することができ、レファレンス・サービス、専門性をもつ充実したスタッフです。それらは、今全国にある図書館の、一般的なサービスのひとつなのです。

「メディア工房」が
あなたの情報発信を応援します

情報は一方的に与えられるだけでなく、積極的に発信することも必要です。それにより、個人やグループの地域活動や文化活動がより深まり広がります。そうした活動を支援するのが「メディア工房」なのです。

メディア工房では、ちよつとした印刷物や映像を作ったり、製本を体験することができます。また、そのための機材やスタッフがそろっていて、個人やグループが情報を編集し発信する活動をサポートするのです。

メディア工房を使つての情報発信が個人やグループで日常的に行われることにより、地域活動や文化活動がより深まり、交流の輪が拡まります。

ゆふいん図書館のこうした活動は、全国の公共図書館の中でも特徴的な活動として注目されるようになるでしょう。

日野市立図書館 ● 東京都

「市政図書室」20年の歩みと
将来構想

1973年に開館した日野市立図書館は戦後の、いわゆる「市民の図書館」推進の出発点となった『中小都市における公共図書館の運営（中小レポート）』（1963）の思想を体现する図書館として名高い。

「民主主義の基礎としての国民に対する資料提供」という考え方に基つき、図書館の開館と時を同じくして、約40㎡の「市民資料室」を設けたが、すぐに手狭になった。

そこで、1977年の市庁舎建て替えの際に、「地方行政の実状に関する資料を公共図書館が網羅的に収集し、住民が地方行政について知ることを保障することは公共図書館の重要な役割である」という市民の声が反映され、市庁舎の1階に「市政図書室」がオープンしたのである。

資料の収集対象

市政図書室が収集の対象としている資料は、日野市に関するあらゆる刊行物や文書類などである。

日野市役所が作成する資料はもちろんのこと、市民がその活動の過程で作成したパンフレット、報告書、ポスター、著作などはすべて対象になる。これらを、①地方行政資料、②歴史的・地誌的資料、③郷土の現在をあらわす資料に区分している。現在の資料形態はまちまちである。写真、ビデオ、ポスター、地図、ちらし、パンフレット、リーフレット、新聞記事、成人式で配布した「記念品」まである。

資料の収集方法

現在、市政図書室では約3万5000点の行政資料を収蔵している。その中で特に重要な資料は、市役所が移転する際に各課が廃棄した資料から収集したものだそうだ。それ以降は、図書館員がこまめに各課を回って「声をかけ」たり、毎日発行される「新聞記事速報」を配布するなどの地道な努力が実って、「図書館は役に立つ」ことが市の職員に浸透していった。

郷土の現在をあらわす資料の収集は、全図書館員による情報提供と市民からの寄贈によっている。現在収集している市民活動の会報や広報誌類は約400タイトルにのぼる。

資料の保存、検索、利用

情報検索サービスは今後、ますます重要になるだろう。さまざまな私たちの資料はファイルし、背文字を入れてタイトルを登録する。新聞記事や行政資料もパソコンのデータベースに登録し、特に重要だと思われる記事は、

「新聞記事速報」として庁舎内に配布する。毎日約30件、これまで約10万件の記事が蓄積されている。「市政図書室」の将来構想は「地域情報センター」への発展である。

●日野市立図書館 1973年開館／東京都日野市豊田2149／人口約16万5000人

I Love 図書館

暮らしの中の資料こそ宝もの

湯布院在住 山下恭子

新聞に折り込み広告が入ってきます。みんなは、その時必要なものだけを残し、屑かごに入れる……やがてその広告も捨てられる。

毎日毎日くり返されていることに私たちは慣れてしまい、意識することはありません。また、たくさん催物の案内、運動のピラ、ポスター、チケットのデザインにもその時代の特徴が表現されています。時たま30年も前の広告を手にしたときなど、その当時の生活を生きいきと思い出したという経験をされた方もいるでしょう。

それは優れた文学や写真などと同じように大切な情報であり文化です。その地域の暮らしを伝える、世界でただひとつの資料になります。これをゴミにするか宝ものにするかは、地域の図書館の働きにかかっています。

◇集めただけでは、ゴミの山。
◇きちんと分類されていても、しまい込んでいたら宝のもちぐされ。

◇いつでもだれでも、利用しやすいようにしてあってこそ情報になり文化になる。

しかし、この仕事は実際には大変な作業量と知識、能力が必要であり、「図書館は人」といわれるのも納得できます。

湯布院には、こつこつと地域の暮らしや自然環境を調べ、貴重な資料をもっている人がたくさんいます。

それが散らばらないうちに、私たちの手の届くところに置かれたら、この町の様子がもつと身近なものになるでしょう。

長くこの町に住んでいる人も、新しくきた人も、農家もサラリーマンも、歳を重ねた人も、子どもたちもお互いのことがもつとよくわかりあえる場になるのが図書館の地域資料です。

I Love 図書館

記憶することから創造することへ

ゆふいん音楽祭20数年の流れの中で…

ゆふいん音楽祭 加藤昌邦

第20回ゆふいん音楽祭(1994)の折、『黒沼俊夫と日本の弦楽四重奏団』という300ページを越える出版物を出すことになりました。

その経緯は、巖本真理弦楽四重奏団の中心的人物である、黒沼俊夫というチェロ奏者と音楽祭との出会いです。二代目音楽監督としての10年あまりの関わりの中で、音楽家として、その人となりに深い感銘を受けてきた私たちにとって自然の成り行きだったといえます。

出版の動機づけになったのは、日本の室内楽の歴史をひもとこうにも、この種の資料がなかったことにあります。1年あまりを要して、日本の室内楽における歴史が過去から現在の湯布院へ、1冊に刻まれたのでした。

私たち人間には、記憶するという能力が備わっています。それは

時に『宝のような書庫』といってもよいでしょう。それらの積み重ねの中から、創造力や未来を切り開く力が現れ、重みを増していきます。その総体は、その人の人格とも呼べる世界をかたちづくっています。もし、その記憶の世界が消滅したならば、今生きる力も消滅させることになるでしょう。

町としても、同じことがいえるに違いありません。

町の記憶はどこにあるのか…。

その町の姿はどこへ行けば答えてくれるのでしょうか。いかに経済が発展しようとも、そこには人間の人格に代わるものはありません。この町で暮らす確かさやおもしろさは、創造的な夢を描けるかどうかに関わっています。

私の手元には、巖本真理弦楽四重奏団が使用した楽譜がすべてそろっています。黒沼俊夫の死後、夫

人と弟子たちの希望によって、湯布院へもたらされたものです。

開いてみると、印刷された楽譜の上に文字、記号といった書き込みがなまなましく残されています。それらは生きた情報となり、創造精神の軌跡を追うことができ、他の演奏家にとっては音楽解釈の手がかりにもなりうる貴重な資料といえます。

もし、湯布院に図書館やホールができるのであれば、このような資料を収集することで、ゆふいん音楽祭の歴史を湯布院の地で記録し、未来に向けて開いて行くことにもつながります。

図書館にしろ、音楽ホールにしろ、施設そのものが目的ではなく、ワクワクする精神と夢や憧れの限らない窓口として、この地におきたいと考えます。

それができた時、湯布院の人々の暮らしを越えて世界に開かれ、湯布院のアイデンティティにもっとも近いものになるでしょう。

この本に寄せて

竹内 哲
〔図書館情報大学名誉教授〕

湯布院にうかがって、図書館についてのお話をしたのは去年の6月でした。それ以前から今日までのみなさんのご努力が実って、『未来をひらくゆふいん図書館』が立派にできあがりました。心からお喜びを申し上げます。私は原稿の段階で拝見しましたが、大変中身の濃い、最高級のご馳走のような内容です。そこで、その後のお茶とお菓子とを差し上げて、くつろいでいただこうと思います。どうぞそんなおつもりでこの小文をご覧ください。

① 図書館で育つ子ども

水戸の三上さんは建築家です。東京から4歳のお孫さんが遊びに来ました。このお嬢さんの家のそばには図書館があつて、いつも本を借りてきては読んでいるといいます。そこで三上さんは、水戸の市立図書館に連れて行くことにしました。お嬢さんはおじいちゃんの手をしっかり握って歩いていましたが、図書館の前まで来ると、その手を振りほどき、道を横切って駆け込んで行つてしまいました。取り残されたおじいちゃんは茫然としました。初めてここに連れてきたのです。それな

のに、ここが図書館だよという前に、お孫さんにはわかつてしまったのです。急いで後を追いながら三上さんは考えました。なぜ4歳の子にそれがわかったのだろうか？ きっと、自分がいつも行く図書館と共通なものを感じ取ったからに違いありません。図書館の活動がこのお嬢さんに語りかけたのです。

図書館とはそういう力を持つところなのか、と三上さんは考え込みました。実はこの図書館を設計したのは三上さんなのです。図書館の持つ大きな力をお孫さんに教えられた三上さんは、それ以後、図書館のサービスを「生かし、支える建物」を追求しておいでです。

ちなみに、そのお孫さんは今中学生です。友だちから「ベットの餌つて、何がいい？」などと聞かれて、一所懸命本を調べ、答えを出しているそうです。自分だけでなく、友だちの心も新しい世界に向かって開く——小さいときから図書館で育ってきた人の一例です。

② 困ったことを解決

80年前、アメリカにルイス・シヨアーズという高校生がいました。生徒たちは物理の時

間に教科書を暗記して来て、先生の質問に答えなければなりませんでした。磁性という問題が当たることになったショアーズ少年は、教科書の暗記に取りかかりましたが、その説明がよくわかりません。わからなければ暗記もできません。困った彼は学校図書館に行き、これぞと思う本を6冊選び、それぞれの本の索引を調べ、内容を読んで考えました。そこに出てくる参考文献も探して読みました。そうするうちにこのテーマをはっきりと理解できたのです。もう暗記の必要はありません。彼は教科書を閉じたまま、堂々と磁性の説明をして、先生をびっくりさせたといえます。ここで大切なのは、そのときの成功だけではありません。教科書でわからなくても「調べればわかる」こと、そしてそれには「方法が図書館を活用して勉強を続け、29歳で博士号を得、世界的な図書館学者として高く評価されました。この人の専門は、この本の中で読書案内とか相談業務として紹介されている分野です。彼は、情報や知識の探し方を組織的に研究し、それを通して一人ひとりの生き方の応援をしたのです。私の34年前の恩師で、まことに非凡な方でした。しかしその基礎となった高校時代の経験は、私たちみんなにあることですし、図書館という環境をつくることで、だれにでも実践できることなのです。

③ 人の輪ができる

先日豊中市（大阪府）の学校図書館を見学しました。ここでは各学校に司書教諭のほかに学校司書を配置する努力をし、今では公立学校の4分の1、13校に司書がいます。この人たちは、子どもの心を開き、その子たち一人ひとりの学習を応援し、先生方の授業の展開を助けるのを仕事にしています。

その人たちの努力で学校図書館が動き始め、資料の充実が図られました。それでも一学級の調べ学習ともなると、人数が多く、興味も多様で、ひとつの学校図書館だけでは対応できません。そこに公共図書館からのバックアップが必要になるのです。

一方、学校図書館を使つてする学習がカリキュラムに組み込まれると、子どもたちは公共図書館にも出かけて自分で調べ始めます。自発的に学ぶことを覚えた子どもたちは、調べることを楽しみ始めるのです。そういう姿勢と、そこから出てくる質問が、公共図書館を変えます。親も子どもが変わってきたことに気づきます。そこで、子どもの読書と学習について、学校司書、先生方、公共図書館の司書、そして親を含む人の輪が、地域に広がって行きそうなのです。まだはつきりした形ではないかもしれませんが、でもそういう芽が見えます。それが図書館のかかわる、人の

輪の一例なのです。

そう考えると、湯布院らしい人の輪がいくつも考えられるでしょうし、もうすでにあるとも聞いています。その活動が、図書館を持つことで活性化されるのです。

④ 過去、現在、そして未来へ

これはみなさんがよくご存じのことです。昨年湯布院にうかがった時、町の始まりから今日までのことを書いた印刷物をあちこちで見ることができました。また、今までの節目ごとのみなさんのお考えや活動が記録として残されているという話もうかがいました。この本の37ページ、『この本をつくるために参考にした本』の中にそういう文献がいくつも出てきます。そのほか、手書きのものや謄写版で印刷したものも残っているのではないのでしょうか。それはみなさんが一所懸命この町のことをお考えになったことの記録です。かけがえのない宝物なのです。

その宝物によって未来を創造するのには、少なくとも二つの条件があります。第一にだれもが使えること、第二に自分と違う考えを排除しない、ということです。

だれもが使えるようにするには図書館に集めるのがいちばんですが、しかしそれぞれに所蔵者の事情や思い入れがあることでしょう。また、貴重さや紙の性質などからとても

公開はできないという場合もあると思います。それを全部図書館に、とさえなくてもよいのです。せめてコピーを図書館に置けば、一応の役には立ちます。要は文書の形で残っている先人の生活と考え方をみなさんで「持ち寄り」、次の時代を開くために今の人たちが「分け合う」ことなのですから。

それから、違う考え、違う見方は、考えを発展させる時にとっても重要です。それがあって初めて全体像が見えてくるといえましょう。違う考え方の存在を認めることは、町全体の「健康さ」の証明でもあります。

町に図書館ができるとは、このようなことが形になって、みなさんの前にあらわれるということなのです。それがみなさん一人ひとりの生活とかかわり、やがてみなさんの「持ち寄り」と「分け合い」の結果、町の発展につながって行くのだと思います。

そこでもうひとつ、図書館はみなさんに「自分と向き合う空間」を提供します。本棚の前に、あるいはちよつとしたコーナーに、忘れていた自分に出会う場所が見つかるはずですよ。これは今の世の中でいちばん欠けていることのひとつです。そこに、個人と地域の自立の根があると思うのですが、いかがでしょうか。

あとがき

自ら学び、考え、行動する人たちがたくさん育つ町。

当財団が平成9年度の事業の中心に公立図書館実現のための環境づくりを据えて取り組んできたのはそうした願いからでした。

その1年間の調査、研究の成果の一端として、ここに『図書館のある暮らし』とはどんなものか、『未来をひらくゆふいん図書館』のイメージを住民のみなさんにつかんでいただきたいとまとめた小冊子をお届けする運びになりました。湯布院に暮らす人々の間に『自分が育つ場としての図書館』を求める気持ちが育つよう願っています。この小冊子が一助になれば幸いです。

調査、研究と執筆・編集を担当された当財団の生活文化研究会の諸氏の労を多謝するとともに、町内外より執筆ご協力をいただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

さらに、取材協力として苅田町立図書館、三日月町立図書館、守谷中央図書館、水海道市立図書館のみなさまには格別なご厚意をいただきました。

最後にこの事業に終始ご熱心な指導、助言を賜った図書館情報大学名誉教授・竹内哲、大分県立図書館長・上村作郎の両先生に深く感謝申し上げます。

1998年 春

人材育成ゆふいん財団 理事長 緒方 重成

この本をつくるために参考にした本

『講座 図書館の理論と実践8 コミュニティと図書館』

竹内恵編 1995 雄山閣

『北欧の公共図書館と生涯教育』

弥吉光長著 日本図書館協会

『山あいの図書館と地域の暮らし』

澤田正春著 日本図書館協会

『生涯学習をめざすアメリカの挑戦』

現代アメリカ教育研究会編 教育開発研究所

『図書館のめざすもの』

竹内恵編・訳 1997 日本図書館協会

『われらの図書館』

前川恒雄著 1987 筑摩書房

『図書館の力』

森崎震二、戸田あきら著 1993 新日本出版社

『子どもの発達と読書の楽しさ』

日本子どもの本研究会編 1986 国土舎

『ストーリーテリングと図書館』スベンサー・G・ショウの実践から

竹内恵編訳 1996 日本図書館協会

『ストーリーテリングの実践』スベンサー・G・ショウ連続講演

竹内恵編訳 1995 日本図書館協会

『子どもが孤独でいる時間』

エリーズ・ボールディング著 松岡享子訳 1988 こぐま社

『個性化と社会化の発達心理学』

堂野恵子、加知ひろ子、中川伸子編 1989 北大路書房

『子どものための人権ノート』

児玉勇二、安田秀士著 1995 明石書店

『これからの図書館』

菅原峻著 1993 品文社

『お話 おとなから子どもへ 子どもからおとなへ』

東京子ども図書館編 1994 日本エディタースクール出版部

『発達心理学／上』周産・新生児・乳児・幼児・児童期

山内光哉編 1989 ナカニシヤ出版

『発達心理学／下』青年・成人・老年期

山内光哉編 1990 ナカニシヤ出版

『子どもの宇宙』

河合隼雄著 1987 岩波新書

由布院'70年代の町造り誌『花水樹』完全復刻版

中谷健太郎編 1995 グリーンツーリズム研究所

『やっぱり図書館がだいじ』大子連児童文化講座の記録

大阪府子ども文庫連絡会編 1997

『地域開発'77／1』湯布院シンポジウム「この町に子どもは残るか」

財団法人 日本地域開発センター 1977

『湯布院町総合計画』

湯布院町 1992

『県立図書館の役割と実践』一都道府県立図書館の実践事例集一

文部省編 1995

『本はともだち』一公立図書館の児童サービス実践事例集一

文部省編 1996

『地域と施設をこえて』一公立図書館における連携・協力の実践事例集一

文部省編 1997

『情報化白書』

コンピューターエイジ社編 1997 コンピューターエイジ社

未来をひらくゆふいん図書館

1998年3月26日発行©

編著者	財団法人 人材育成ゆふいん財団 生活文化研究会 加藤真樹子 清水聡二 岩尾豊文 嵯峨創平
編集人	岩谷宗彦
表紙	沢辺均©
写真	漆原宏©(p.9、13、15、21、27) 石松健男©(p.8) 菊田町立図書館 (p.24)
表紙用紙	ケナフ 100 菊判 93.5kg
本文用紙	スマッシュ 菊判 53.5kg
使用書体	太ミン A101(本文 14 級) 見出し ミン MA31 見出しゴ MB31 新ゴ L 新ゴ M ゴシック MB101B 新正楷書 CBSK1
使用機器	Power Macintosh 6200/75 Adobe PageMaker 6.0J Adobe Illustrator 5.5J Adobe Photoshop 4.0.1J
印刷所	株式会社 桐原コム
発行者	緒方重成
発行所	財団法人 人材育成ゆふいん財団 〒879-5102 大分県大分郡湯布院町大字川上 2863 健康温泉館クアージュゆふいん内 電話 0977-85-4748

